
選ばれない人

たぬきくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選ばれない人

【Nコード】

N6665G

【作者名】

たぬきくま

【あらすじ】

三角関係の修羅場中に異世界に飛ばされちゃった女の子のお話。選ばれなくても、どんな状況でも力強く生きていく強い女の子の更に強くなって行くお話。

プロローグ

プロローグ

いわゆる初めての彼氏ってやつだった。

顔面がモロ好みで性格とか考えずに猛烈アタックをかまし、彼女の地位をもぎ取った。

自慢の彼氏。

調子にのって、お惚気モード全開でどこに行くのも一緒。友達に会うのも一緒。

・・・。

現在、幼稚園の時から友人。幼馴染と彼氏と私の三人で見詰め合っている。

いわゆるド修羅場ってやつだ。

幼馴染は昔から可愛かった。ふわふわの砂糖菓子みたいな女の子。いつも笑顔で私の大切な物を奪っていく。

大切にしていたクマのぬいぐるみ。

大切にしていた可愛いシャーペン。

大切にしていた素敵なカチューシャ。

大切にしていた青みがかったピンクの口紅。

「私の方が似合うね」

クマのぬいぐるみは、ふわふわの彼女に似合っていた。

シャーペンも、可愛い彼女に似合っていた。

カチューシャは、素敵な彼女に似合っていた。

そして、私が大好きで似合わないのに無理して買った、青みがかったピンクの口紅は色白の彼女をより可愛く見せていた。

だからって彼氏まで奪うの？！

「奪ったわけじゃないもん！彼が私を選んだのよ！」

彼は私から目をそらした。

・・・。

そりゃそうだろう。ここで私の目を真っ直ぐみれる男なら私に現場を抑えられる前に自ら告白するだろう。

「あなたの幼馴染の方が好きになりました」と。

誰も何も言わない気まずい沈黙が続いた。

その気まずい沈黙を打ち破ったのは意識が飛ぶほどの閃光だった。

第一話

口と鼻と耳に水が入ってくるのが分かった。
苦しくて必死にもがく。

「がはがはがは」

乙女なのに、沼から這い上がる化け物のような声が出た。
しかたない。死ぬところだったのだから。
しかも、必死にもがいたのに水深が膝の所までしかない浅い池だったのは悲しい。

浅い池に落ちた……。

おかしい。私は人生初修羅場を体験していたはず。
辺りを見渡して驚いた。

今までいていた場所と違う。

何処かの庭園（？）のよう……。

「へっぶしゅ」

加藤茶を超える会心のクシヤミが出た。
取りあえず池から出よう。

「ここどこ？」

頼りない細いソプラノが聞こえてきた。
ヤツだ。ヤツの声。

「桜子。あんたも居たの？」

幼馴染が可憐な姿で芝生に横座りしていた。
私は池。ヤツは芝生。
人生って厳しい。

「華ちゃん！ここどこよ！」

「知らんわ！！！！」

間髪入れずに答えた。

私は目先の事でイッパイイッパイよ。

とりあえず、ずぶ濡れのスプリングコートを脱いでしぼった。

中に着ていたカットソーも、もちろんデニムもずぶ濡れ。

「%&#”——！！！」

訳の分からん声が聞こえてきた。

桜子と目を合わせる。

「何だか変な声聞こえたよ」

大きな黒い瞳をウルウルさせて桜子は私のカットソーをつかむ。

本当は抱きつきたいのだろうが、私はずぶ濡れ。濡れるのが嫌なのだろう。

私はそんな桜子の計算がイラッとして抱きついてやった。

「ダイジョウブデスヨ。サクラコちゃん」

「イヤー！！華ちゃんの意地悪！！濡れちゃったじゃないのよー！！」

ポカポカ殴りかかってくる。

「%&#\$”\$%&&’,’,’（〓）？>〰〇！！！！！！！！」

殴りかかって来る桜子に気を取られていたら、いつのまにか髪の毛の青いおっさん達に囲まれていた。

「さ、桜子！！！！！！」

「華、華ちゃん！！！！」

二人で抱き合って叫んだ。

おっさん達は太陽の光をキラキラと反射させる剣みtainのを私た

ちに向けている。

この間見たレッドクリフの映像とダブる。

「は、華ちゃん」

恐ろしさに大きな瞳をウルウルさせて震えながら静かに泣く桜子を抱いて私は・・・。

私は号泣していた

「ザグラゴッ！！ここどこよッ！！！！！！」

第2話（前書き）

暗いです。

今回だけは暗いです！

第2話

目が開かない・・・。

無理に開けると、もう見慣れたトイレが見えた。

知らない場所で、訳の分からない言葉を話す青い髪のおっさん達に連行されて学校みたいな所に連れて来られて桜子と離れ離れになった。

桜子と彼と三人で修羅場体験したのが、すごく昔に思える。

鉄格子のはまった窓から月のような物の光が薄く差し込んでいる。

月と呼んでよいのかも分からない。

何せ6つもある。

そのせいか、星は見えない。

6つの月をもう30回は見ている。

一ヶ月たったのかな？

ここは1年が365日なのか1ヵ月が何日なのかも分からないけど。

自嘲気味な笑いがこみ上げる。

私はずっと泣いていた。

ここは窓とトイレしか無い。

最初は訳が分からなくて大声で叫び、泣き喚いた。

誰も来ない。何も起こらない。

ただ、6つの月が無くなって周りが明るくなってきたら壁に開いた小さな穴から食べものがやってくる。

パンみたいなのが1つと水。

随分とやせた。

気にしていた二の腕と太もも。下腹。

あのプニプにが懐かしい。

また涙が出てきた。

声は出ない。

掠れた悲鳴みたいな音が出るだけ。

臭いにも慣れた。

公衆トイレの臭いを濃縮させたようなヒドイ臭い。

慣れるまで何回も臭くて吐いた。

硬い床にも慣れた。

ベットも布団もない。

そんな所で寝ていたので体中痛かったのに。

それでも涙は止まらない。

私は泣かない女だったのに。

父さんと母さん。お姉に弟。ばあちゃんにじいちゃん。叔母ちゃん。

叔父ちゃん。

友達達。

楽しかった事を考えても涙は止まらない。

桜子はどうしているんだろう・・・。

あの子は私よりも適応力が無い。

枕が替わっただけでも眠れない子なのに・・・。

桜子の心配をしている自分に泣ける。

「ヤツが彼を取らなければ こんな事にならなかったのに。」

掠れた声で言ってみる。

涙が止まらない。

桜子のせいじゃないのは分かってる。

私の物を欲しがるあの子。

「嫌だ」って言えば良かったのだ。

なのに、私よりも似合う桜子を前に言えなかったのは私。

似合わなかったって大事な物なら守れば良かった。

彼だって、本当に好きなら、もう一度 体当たりすれば良かった。

彼が桜子を選んだって諦めなければ良かった。

今ならそうする。

だから神様。私を元の世界に戻して下さい。

第3話

「華ちゃん!!」

壁が動いてフワフワがやって来た。
懐かしいソプラノボイス。

「桜子・・・」

開かない目を無理に開けると、フワフワでキラキラの桜子が見えた。
文字通りお姫様の格好で。

髪は優雅に結い上げられ、美しい首のラインが出ている。

その首には日本では○輪さんかデ○婦人か○姉妹位しか 着けているのを見たことが無い巨大なキラキラが・・・。

「華ちゃん臭い!!!」

眉間に皺を寄せて言い放つ桜子に嫌がらせに抱きついたまま意識を手放した。

ここには無い星が見えた。キラキラだ。

目を開けたらフワフワが泣いていた。
昔からよく泣く。

些細な事で泣き、自分の立場を有利にする為に泣き、失敗をごまかす為に泣いていた。

でもこんな泣き方は久しぶりだ。

「ぶっさいく」

「華ちゃん！……！気づいたの？って何よ！……！そのぶっさいくって……！」

桜子が両肩を揺さぶりながら叫んでる。

夢じゃないな。

「桜子。鼻水出てる。」

殴りやがった。事実を言ったただけなのに！

「桜子。説明希望。なんでキラキラ？」

叩かれた頭は痛いを取り合えず現状を理解したい。

あの臭い所とは全く違うロイヤルスイートな部屋。

ベットはフワフワ。大きな窓にはレースのカーテン。

桜子が渡してくれたコップの水は人生で一番おいしい。

「華ちゃんの言ってる意味は半分しか分からないけど、ここはお城」

桜子がバカに見えた。

「華ちゃんバカにしてると思うけど、本当だから。」

第4話

城・・・・。

城って城？姫路城とか二条城とか名古屋城とか？？？？
頭が痛いので寝ることにする。

「華ちゃん！！！！華ちゃんしっかりして！！あなた達が華ちゃんをあんな所に入れるからでしょ！！！」

「&%\$#!~)(<>|‘%%%%%%%%」

「華ちゃんに何かあったら、許さないから！」

桜子が鬼の形相で青い髪のおっさんに詰め寄ってる。

おっさん何だか謝ってる様子。

桜子の怒りが更にヒートアップ。

お〜。

・・・・。

「って桜子！！あんた会話できるの？！ゴホッ！！」

急に起き上がって大声でしたら眩暈がした。しかも咳も止まらない。

誰かがコップを渡してくれた。

ありがたく頂く。

美味しい。

渡してくれて人にお礼を言おうと目をやると、ひよこが居た。

黄色い小さな頭。金髪ではなく黄色。

メイドさんの様な格好の女の子。

心配そうにこちらを見ている。

青いおっさん達は顔まで青くなってるよ。

「華ちゃん?! 大丈夫?!?!」

「大丈夫だけど、脳みそが大丈夫じゃない。」

桜子。この人達と会話できるの?」

「うん。賢者の涙もらったから。」

嫌だ。この設定。悪寒がする。何。このファンタジー。

どう考えても私って・・・

「賢者の涙てのをもらったら会話できるようになるのね。」

「うん・・・。」

桜子が気の毒そうな目で私を見ている。

嫌だ。この設定。もう一度言う。

絶対嫌だ。

この設定。

「みなまで言うな!!!! 私の方は無いのは分かってる!!!!」

神様。私は何なのでしょうか?

第5話

私はすごいラッキーな人間だ。

3ヵ月程前にヘンテコな所にやってきて、トンデモな場所に放り込まれた。

なのに今はこうして優雅に紅茶っぽい物を飲んでいる。

『ありがとう。ヒヨコ』

茶をいれてくれた黄色い女の子にお礼を言うと黄色いヒヨコが、はにかんだ。

かわゆいヤツめ。

黄色い頭がフワフワと可愛いのでなでてみた。

真っ赤になってアワアワしている。

本当にかわゆい。

危ないおじさんになりそうだ。

乙女なのに。

桜子と劇的再会を果たしてから早2ヶ月。

やっと現状認識ができた。

ここは異世界。

そしてお城。

なんだか君主国家なんですって！

そももって、この世界で5本の指に入るデッカイ国なんですって！！

後継者には異世界の花嫁が選ばれるんですって！！！！

異世界の可憐な女性なんですって!!!!!!!!!!
だから召還するんですってよ!!!!!!!!!!
可憐な乙女を!!!!!!!!!!

どこの国にも家にも縛られずに、後継者（皇子？）のみに縛られる
麗しの乙女なんですって!!!!!!!!!!!!!!!!!!

バキッ！！

あらカップが割れたわ。力みすぎたわね。

「&%\$###&?」

ヒヨコが心配して私の指に傷が無いか確認している。

この国の言葉は難しく、賢者の涙とやらをもらえない私は中学1年生の英語並みくらいしか分かん。

それでも　すごい勢いで覚えております。

人生で一番勉強してる。

受験勉強よりも更に！！一日の大半は語学勉強よ！

ヒヨコが新しいコップで新しい紅茶っぽい物を入れなおしてくれた。

ちなみにヒヨコはヒヨコと言う名前ではないのだけれど、あまりにも発音しづらい名前なので私はヒヨコと呼んでいる。

本人も何だか気に入っているらしい（桜子談）

「華ちゃん！」

「異世界の花嫁」。花嫁修業はどうした？」

そう。私は異世界の花嫁召還に誤って引っ付いて来てしまったオマケだった。

オマケの私は邪魔なので牢屋に放り込まれたらしい。

死んだら何だか目覚めが悪くない？ 的な感覚で生かされてたらしい。桜子が花嫁に決定したので私はもう処分した方がよくない？ って話になったのを桜子が偶然聞いて（盗み聞き？）後継者さんに泣きついた。

で、現在に至る。

私は元気に茶を飲んでます。

二の腕のプヨプヨも復活しつつあります。

私はラッキーだ。

生きている。

元気だ。

「は、華ちゃん痛い」

でも桜子のホッペタをビヨーンとひっぱっても良いよね？！

第6話

異世界生活・・・。

もう泣くことは無くなったけど、どうして良いか悩む。
なんとか覚えたこっちの言葉で青い髪の人に

『元の世界に帰れないか？』

と聞いてみたら喉元に殺傷能力満点の剣を突きつけた。
号泣したよ。

聞いちゃダメな質問だったらしい。

でも、私を元の世界に帰さずに、ここで面倒見てるってことは、帰れる可能性って低いんだろなあ。

私って何なんだろう。

桜子にはする事がある。

こっちの世界の事を学んだり、後継者の妻としての心得（？）などを学んだり。

でも、私は基本 「放置」

与えられた部屋と部屋の外にある庭だけが行動範囲。

それ以外の所に行こうとすると青い髪のおっさんが鬼の形相で文句言ってくる。

何を言ってるのか、さっぱり分からないけど。

監禁？軟禁？

桜子の婚約者。この国の後継者とやらにも会った事ない。

ヒヨコと青い髪のおっさん達以外との接触は無い。

たまに、隣の庭みたいな所から生垣の隙間をぬって赤い髪の少年が

こちらを覗いているのを見つける事はあるが、目があつたら居なくなってしまう。

私はこのまま このわけの分からん状態でずっと生きて行くんだろ
うか？

家族には会えないのかな？

本当にこのまま？

「どうされましたか？」

暗い気分で遠くを見ていると心配したヒヨコが駆け寄ってくる。

「平気」

笑顔で答えるとヒヨコは安心してポワポワと笑う。

この子も気の毒だよな。

毎日、私の面倒をみてる。

休みとか無いのかしら？

「ヒヨコ休まないのか？」

たぶん、怪しい中国人の日本語みたいになってると思われる こっ
ちの言葉で聞いてみる。

「休み？夜は休んでますよ。」

会話にならん。

こっちの人間に休日という観念はないのか？

ってか休日っていうこっちの言葉が分かんない！

桜子に後で聞いてもらおう。

ダーーーーン!!!!

ものすごい音が外から聞こえた。

怯えながら外の様子を伺うと庭にポツコリと穴が開いていた。

クレーター？

隕石でも落ちたのかと思い目を凝らすと、中心に人がいた。

真っ赤な髪の毛が見える。

「お前が%&%&%の女か」

途中何を言ってるか分からないが、どうやら私に用事があるらしい。
赤い髪の毛のハンサムさん。

ちょっぴりタイプかも・・・。

「ふん！大きな態度だな。頭も下げないとは！」

あ、訂正。

ヤなヤツだ。

ヒョコを見ると膝を折り、頭を下げバレリーナのように しんどそ
うな体勢を取っている。

どうも偉い人っぽい。

「###\$#"め」

意味は分からないがものすごく侮辱された気がする。

赤い髪に赤い目。

尊大な態度。

「誰だお前」

にも関わらず聞いちゃったよ。

たぶん、敬語とか言えてないんだろうなあ。

赤い髪の偉そうな男は文字通り赤鬼になった。

「殺す!!!!」

恐ろしい言葉で詰め寄ってくる。

冗談な感じは一切しない。

ヒヨコが悲鳴をあげて倒れた。

ここで死ぬのかしら？

第7話

「ぐうつつ！」

赤い髪の男は容赦無く首を絞めてきた。

首を絞められたら舌が引っ込むって言うのは本当なんだな。

そんな感想を持つ冷静な自分に笑えるが、余裕も酸素不足でなくなってきた。

全力で抵抗しているが相手は全くダメージを受けていない。

『アンラ！やめるんだ！』

「フン！ソウスケが言うならそうしよう」

「ゴホゴホゴホ！！！」

第三者の介入で赤い男はゆっくりと私の首から両手を離した。

新鮮な空気が肺を満たす。

深呼吸を続けていると 脳みそが動き出した。

今、日本語が聞こえた？

『大丈夫？華さん！』

心配そうに近づいて来る黒い男。

黒い髪に黒い瞳。ドストライクな顔面。

似てる。私の彼氏。イヤ正確には元彼？

彼が年を取るとこんな風になるんだらうな。

更にタイプな感じ。

「ソウスケ。知り合いか？」

赤い髪の男が面白くなさそうに言った。

ソウスケ？

名前まで一緒なのね。

元彼の名前は市原宗佑いちハラ そうすけ

『華さん。ああ首にこんなアザが！アンラなんて事を！』

ああ。間違い無く日本語。

なのに、こっちの世界の人と会話できる。

彼も選ばれた人なんだろうなあ。

偉そうにしてるし。

オマケでこっちの世界に紛れ込んだ人間なんて私だけなんだろう。

涙が出るよ。

・・・。

って。っちよと待ってよ。この人何で私の名前知ってるの？

『もう二度と会えないかと思ってた。華さん。僕だよ。宗佑。市原宗佑！』

気が付いたらぐうで殴っていた。

ほとんど条件反射？

第8話

目の前に頬を腫らした元彼がいる。

人生で初めて渾身の力で人を殴ったが、不思議と後悔とか罪悪感とかが無い。

かと言って爽快感も無い。

あるのは「殴り足りぬ!!!!」というドロドロとした黒い汚い感情だけだ。

半分八つ当たりもあるけどさ。

宗佑の後ろにアンラとか言う赤い男がいなけりゃ、更に殴ってただろう。

人間って簡単にバイオレンスになれるのね

気絶したヒヨコは声をかけると、すぐに復活した。

そして、その瞬間から全力で動き出し、こちらが唾然としている間に「おもてなしの準備」を完璧にこなしていた。

メイドさんの鏡！

顔色がまだ良くないのが気になるけど。

可愛い上に仕事出来る。嫁にするなら　こんな子が素敵♪

「お前&%\$#Bの癖に　こんな良いお茶飲んでるとはな。」

言葉は通じなくとも悪口って伝わるのよねえ。

悪意をビシバシ感じる。

『勝手に人を巻き込んでおきながら言える　その神経がうらやましいわあ』

笑顔で言っておいた。

両方の言葉が分かる宗佑だけが私達の間で青い顔をしている。赤い男が通訳を求めているが、必死で首を横に振ってる。

「宗佑も召還された訳ね。で、後継者の花嫁？」

「華さん。僕は花嫁にはなれません。男ですから。」

そんな事はわかつとるわ！

なまぬるい視線を宗佑にむけると、あせって話し出した。年をとっても性格って変わらないのねえ。

「えっと。伯爵家に男子が産まれなくて、マティが爵位を継ぐにあたって配偶者を選ぶ時に　どこにも繋がりが無い人の方が良いって事で」

「・・・。ちょっと待って。私達三人は一緒にこっちに来た訳じゃないの？」

ツツコミ所　満載な話だが一番聞きたい事を聞いた。

東北土産の赤い牛のように首をコクコクして話を続け出す。

「うん。あのすごい光の後、気づいたら一人だった。で、驚いて二人を2時間くらい探してた。そしたら　また光って・・・。

気づいたら　知らない所に居た。」

しばらく無言で見つめあう。

宗佑もオマケで巻き込まれたかもって淡い期待は、あっけなく消え去った。

「それよりも華さんはどうして賢者の涙を食べてないの？言葉あんまり通じてないよね？まずいけど体に害はないよ？」

ポヨヨンとした顔で言っちゃったよ。この男。
情況見て悟れよ！

神様って本当に不公平・・・
そして私はこんな男のどこが良かったのだろう・・・。
人生の先達の言葉は正しかった。

男は顔で選ぶな

第8話（後書き）

感想ありがとうございます!!!
うれしい！

第9話

ぽよん男 宗佑になんとか悟れと願う事は時間の無駄なので分かりやすく答える。

『私の分は無いみたい。』

軽く答えてみたものの、言葉に出すと改めて傷つくわ。

『どうして?』

ぽよん男が更に傷をえぐる。

もう一度殴りたい。

右手を固めた。

「そいつは呼ばれてないからな」

宗佑に一発入れる前に意外な人物から助けが入った。

赤い男。アンラだ。

今まで会話に参加せず（私の言葉が分からないのも、あるんだろうけど）離れた場所でヒョコに給仕させ優雅にお茶をしていたが、お茶を飲み終わったのか暇になったのか そばに寄って来た。

『でも！ かわいそうじゃないか！ 勝手にこっちに呼んどいて、それはひどいよ！』

ナイス！！！！

宗佑！ 初めて良い事言ったよ！

「貴重なんだよ。あれは。それをこんな&%\$#に使えるか！」

終了！

夢断たれる。

『宗佑。今 彼はなんて言ったの?』

悪口言われてるのは分かるが、いつも連発される言葉の意味はいいかげん知りたい。

ヒヨコに聞いても悲しそうな顔するだけだしさ。

宗佑も言いよどんでいる。

よっぽど嫌な事なのかな。

『えっと。すごいヒドイ言葉だよ』

『いいよ。分かってるから。』

ものすごく哀れんだ目で宗佑は意味を教えてください。

『力の無い美しくない役立たずな物質』

・・・

そんなに長い意味があんの？あの単語に。

しかも物質って。

人間、いや生き物とさえ見てもらえてないのか。

「何＜M受けてる？」

赤い男には私がショックを受けている事が不思議で仕方ないらしい。

『華さん。ここはね日本とは違うんだよ』

日本ってか地球でもないだろ！

『何か魔法？みたいな、それとはちょっと違うんだけど、こうすごい力があるの』

知ってる。その人庭にクレーターみたいな作るほどの勢いで落ちてきたじゃん。

『その力でいろんな地位が決まるの。その・・・。その力の強弱は容姿で判断できるの』

便利な事で。

『だから……。その……。容姿が……。』

言いにくいわな。さすがのぽよん男も。

美しくないから、人間とカウントされないんだよ

とは。

「&%\$#のくせに、感情を持つな。ソウスケ帰るぞ。こいつは使えない。」

『で、でも華さんは……。』

「教えただろ。？>* は必要ない」

二人で何か話し合ってた来た時と同じように、勢いよく帰っていった。赤い男が宗佑の肩に手をおいたと思った瞬間、もう姿が消えていた。

誰か、ここの状況を教えてくれる人が必要だ。

私を人間と見てくれる人が必要。

ヒヨコの動きを見つめる。

この子は私をどう見てる？

「どうされました？」

凝視しすぎたのかヒヨコが寄ってきた。

ヒヨコは私をどう思ってる？動物？召還された花嫁の持ち物？

どれだ？

メイドさんの仕事を完璧にこなすヒヨコ。

親切にしてくれるし、丁寧に対応してくれる。

でも壺にだって同じ態度を取れるだろう。

「アンラ様がここに　いらしゃったのか?!」

勢いよく扉が開き青い髪のおっさん2人が飛び込んできた。
来客の多い日だ。

いつもより4割増しな感じでピリピリしている。

「はい。」

ヒヨコが笑顔で答えている。

「ちっっ!! 貴様もあちら方だったな。アフラ様に¥(&’! これの^+だ!」

指差されたよ。

私がかされるっぽい。

どうなる?

知らない間に握り締めてた手のひらが汗で湿ってきた。

扉の向こうが一気に慌しくなる。

どうなる。どうなっちゃうの?

第10話

「起きろ。」

宗佑達が来て、青いおっさん達が騒ぎ、自分がどうなるかと不安いっぱいで過ごしていたが、その日はそれから何事も無く静かに過ぎた。

・・・。

と思ったら夜中に叩き起こされた。

『な、なに？』

寝ぼけ眼で辺りを見回すと、目の前に茶色の髪の方がいた。ここに来てから初めて見る色。懐かしい。

「食え。」

何だか訳の分からない物を押し付けられた。ハッキリ言って不気味。

乾燥されたフルーツに見えなくも無いが、夜中に叩き起こされ見たことも無い男に押し付けられてあっさり口に出来る品では無い。

躊躇していると、後ろから羽交い絞めにされた。一人じゃなかったんだ！

かたくなに口を閉ざしていると鼻をふさがれた。

思わず口が開く。

その瞬間に不気味な物を容赦なく口に入れられた。慌てて吐き出そうとすると今度は口を塞がれ無理やり飲み込まされた。

もの凄く不味い！

喉にまとわりつく苦味。

ベットサイドにある水を取ろうと手とやると茶色の男に顎を捕まれた。

「本当に力の無い美しくない役立たずな物質だな。」

言われた事に腹を立てるよりも、言っている意味が分かる事の方が大きい。

さっき無理やり食べさせられたのが、賢者の涙？

「おい。お前このまま、宮殿に居たら殺されるぞ。」

この人は今まで見た こっちの人の中で一番ブサイクだ。しかも小太り。更にチビ。

あの日本の隣のトンデモない国の將軍様にちよつと似てる。

この人の方が随分若いけど。

「頭の動きも悪いのか？それとも涙がまがい物？」

「やっぱり、あれが賢者の涙なのか。言葉が分かることにちよつと感動してた。」

「暢気なことで。死にたくなかったら付いて来い。」

横柄にいきなり言う。

付いて来いって。なんで？

殺されるってなんで？

私を殺しても意味ないでしょ。

殺されるとしても、お前はなんで私を助けるんだ？

なぜ？何故？なんで？

「あなたは私を助けて何の得があるの？私は力の無い美しく無い役立たずなんでしょ？」

「そうだよ。でも お前の髪の毛と瞳は黒い。そこだけは役に立つかもしれない。」

「かもしれない。で助けるの？役に立たなかったら？」

「知らん。とりあえず今は駒が必要なんだよ。」

駒って。

とりあえず、命は大切。

でも、この人信じて良いの？

「面倒臭い。ザリチュ連れてけ。」

その言葉と同時に意識が無くなった。

第11話

「ザリチュ。起きないぞ。これ」

「異界人ゆえ我々と少し違うのかもしれませんが。」

そんな会話が聞こえたと思ったらペチペチと頬を叩かれた。
痛い。

「起きろ。俺は忙しい」

頬を叩く力が だんだんと強くなってきた。

全力で張り倒される感がイッパイになってきたので、
慌てて目を開ける。

目の前に茶色いショーングン似の男。推定年齢25〜30才 身長1
65cmくらい？

そしてピンクの男。男前。推定年齢20代前半 身長180cm以
上？

男前だけど、ピンクはきつい。

文句なしの男前が真顔でピンクの髪に瞳ってシニールすぎる。

「ここは俺の屋敷だ。好きにしろ。腹が減れば誰かそのへんのヤツ
に言え。」

茶色の男はピンクの兄ちゃんに何か合図をして出て行った。
部屋の中にピンクと二人。

ある意味メルヘンって言えばメルヘンか？

お互い無言で見つめ合う。

「あの〜。私、どうすれば良いのでしょうか？」

「・・・。アエーシユマ様が何かおっしゃるまで、自由にどうぞ。」

アエーシュマって誰？茶色い人？

「ああ。アエーシュマ様は先ほど出て行かれた貴人です」

ああ。やっぱり。あの人、美しくないけど偉い人なんだ。
あれ？

宗佑が言ってた事と矛盾するなあ。

「ねえ。質問したいんだけど良いですか？」

「私が答えられる事でしたら」

邪気の無い笑顔で言ってるけど、『知ってる事』じゃなくて『答えられる事』って言う辺り、余計な事聞くなと無言のプレッシャーを感じる。

「ピンクの髪の人って多いのですか？」

予想していなかった質問なのか、ピンクの兄ちゃんは固まってる。
鳩が豆鉄砲喰らった顔ってこういうのを表現した言葉なんだろう。
ちよっと口が開いている。

彼の後ろにポカーンと言う字が見えるよ。

「どうなんですか？」

もう一度声をかけると、ようやく動き出した

「そ、そんなに多くはありません」

良かった。

ピンクのおっさんとか現れたら私、笑っちゃうかもしれないよ。

茶色の男みたいなのがピンクだと絶対笑う。

「いろんな色の方が居てますが、全部で何色あるのですか？」

「・・・大きく分けて4色です。」

青い髪の人と黄色い髪の人の子供は緑になるのかしら？

茶色の方は黒い髪は利用できるみたいなのを言ってたから、普通に

してたら存在しないんだろうなあ。

「そもそも、召還って何？」

「知りません」

この人、私と会話する気無いか？

ものすごく真面目な顔して、バカにしている感とかないけど……。

「全然、全く知らないのでしょうか？」

「よく知りません」

一歩前進ってか知ってる事だけでも話してよ！
ピンクものすごく真面目顔。

「あのー知ってる事だけで結構なんですが……。」

「私は『トビト』なので……」

「『トビト』って何ですか？」

「ああ、力あるが知能低き者です」

……。

この世界本当におかしい……。

全身に鳥肌がたってる。

怖くて怖くて仕方ない。

ピンクの人は相変わらず真面目な顔で私を見てる。

「な、名前！私は倉敷くらしき華はなです。華と呼んで下さい。」

「ザリチュです。アエーシユマ様の持ち物です」

怖い気分を吹き飛ばそうと明るく自己紹介してみましたが、とっても怖い自己紹介をされちゃったよ。

とりあえず、ここには基本的人権とかありえないと言う事が、よく分かった。
ピンクの人 ザリチュさんでも持ち物なんですか。私って何扱い？
??

「ザリチュ！タルウイの所へ行け」

ノックも無く扉を開け茶色の人が戻ってきた。

ザリチュさんは勢い良く出て行っちゃたよ。

さっさと出て行こうとする茶色の人に勇気を振り絞って話しかけた。

「お聞きしたいことがあるのですが、今お時間よろしいでしょうか？」

眉間に皺を寄せてにらまれちゃったよ。

どうしましょーか。

日本人特有の愛想笑いをする。

「後でまた来る」

愛想笑いが利いたのか以外にあっさり了承したよ。あの人。

しかも愛想笑いに驚いてたな。

あの人が話しの通じる人である事を全力で祈るよ。

第12話

茶色の人、アエーシユマさんは来てくれた。
ちよつと感動。

話の通じる人なのかもしれない。
ザリチュさんの所有者だけど。

「さつさと話せ」

偉そうな態度は仕方ない。だって偉いんだもん。
自分に言い聞かせる

「召還とか本当に分からない事だらけで、混乱しているのですが、
教えていただけないでしょうか？」

「知ってる事は無いのか？」

「自分が力の無い美しく無い役立たずな物質って事だけです。」

自分で言ってる涙が出そうになるよ。
特に物質って辺りが。

「召還は王族のしかも直系一族のみが行える秘術とされている。」

「あの・・・話の途中で質問しても良いですか？それとも話終わ
ってからの方が良いですか？」

途中で質問して気分を害されて何かされては堪らんので聞いてみた。
「好きにしろ」

この人、やっぱり話が通じそう。

「宗佑・・・あのアンラと言う人と一緒に居てる黒い髪の人なん
ですが、彼も私と同じ所の人間なんです、ここに。
彼も後継者さんに呼ばれたのですか？」

「ああアールマティの配偶者だろ。あれも、問題だな。伯爵家の当主は現王の兄君なんだ。後継者レースから外れたな。」

「ものすごい嫌な感じなんですが……。」

アエーシュマさんは楽しそうに笑った。

「そもそも後継者ってなんだと思う？」

「王様の息子さん？」

アエーシュマさん更に笑う。

「そう。それは正解。そもそもこの後継者の選び方が問題なんだ。」そばにあったグラスにお酒っぽいものを なみなみと注いで渡してくれた。

なんか良い人っぽく見えてきたのは気のせいかな？

「現王の時にも召還が行われた。お前と同じ黒い髪の女が来た。誰の為に来たと思う？」

アエーシュマさんはずっと笑ってる。

良く見ると目は笑ってない。

良い人に見えたのは気のせいだった感じ。

「後継者さん。……。まさか伯爵さんでしょーか？」

「正解だ。飲め」

そう言われて断れる状態にありません。

酒は強い方だし、酔っ払う事はないだろう。

一口のんで手が震えた。

ものすごいキツイ。

「その通り。その時、後継者だったのは現伯爵様だ。じゃあ何故王にはなれなかったと思う？」

「召還された花嫁が……。」

「正解！ 飲めよ！」

更に注がれた。

もう、すごいグチャグチャな事が増える一方なんですが何この世界
！！！！

グチャグチャを吹っ切るためにも思い切って飲んだ。

テキーラに近いのに、ワイングラスっぽいので飲むって匂いも味も堪らん。

きつすぎる。

でも酒でも飲まなきゃ聞けねーよ。こんな話。

「その花嫁は現王を選んじまった。で、選ばれなかった伯爵様はその時は何も事は起こされなかった。決まりだしな。」

そう言ってキツイお酒を一気にあおった。

大丈夫なんだろうか。

「そんな伯爵様は自分の花嫁に妹君を選ばれた」

飲んだ酒を噴出しそうになった。

えーと。

この世界は近親婚って大丈夫なの？

「私の世界では近親婚は認められてないのですが、ここは大丈夫なんでしょうか」

「稀人まれびとの間ではな。力がある者同士であれば力のある子が生まれるしな」

力あっても、他の大事なのを無くしてないか心配ですよ。

病気とか神経障害とかいろいろ・・・。

ハプスブルグ家とかそんな滅んだのそれが原因じゃなかったけ？

「そうなるが一番純粋な血統は伯爵家になる。血は濃いしな。自分の子供を時代の王につてな」

「えーと。後継者さんって血の濃さでなるのでしょうか？」

「ああ。それと異界の花嫁に選ばれればな。しかし、伯爵家の男子は成長せずに産まれてまもなく亡くなってしまった。」

ああ。やっぱり。

近親婚はダメなのは一緒か。

弱いな。

遺伝子はこの世界と近いのか？子供が出来るから異種って事はないだろう。

「唯一 生き残ったのが女子。アールマティ。」

ちょっと待って。

その彼女の為に呼ばれたって宗佑言ってなかったけ・・・

「この国は今まで女王は居ない。しかし女王が駄目だと誰も言った事は無い。」

手が震えてきた。

足も・・・。

「先に召還したのは伯爵様だ。5年前に花婿を呼んだ」

「じゃ、じゃあ彼女が後継者さんでは？」

「そうだな。普通はな。でもな。後継者には異界の花嫁なんだ。花婿では無い。」

むちゃくちゃじゃないですか。

女同士で結婚は認められているのでしょうか。

子供は出来ちゃうのこの世界では？

「王の一番の責務は後継者を作る事だ。自分の濃い血を引いたな。女同士では子は出来んから花婿を呼んだ。」

えーっとアールマティさんは何でそんな無茶をなさるのでしょいか。呼んだら揉めるの分かってるじゃん。

アールマティさんが従兄弟あたりと結婚して血を濃くして男子出産して、その子を後継者とかにすりゃ良いのでは無いでしょうか？無理なの？

「しかし、5年待ってもアールマティは子を孕めなかった」

「えっと。彼女はお幾つなのでしょうか？」

「20歳だ」

若っ！

若いから妊娠できなかったのでは？これからでは？

「この世界ではそんなに早く妊娠するのでしょうか？私の国では40歳で初産の方も最近多いです」

「何?! 40で?! たしかにアールマティはこれから妊娠するかもしれない。しかし出来なければ? 待てない。」

「えーと。だから王様の子供、現後継者さんに花嫁を召還したんですか？」

「そう。」

「アールマティさんが子供を生んだら彼女が王様ですか？」

「違う。現王が存命中に子を生じた者が王だ。両方できたら・・・。後継者のアフラが王になるだろうな。異界の花嫁はヤツを選んで。花婿じゃない。花嫁だ。」

なーんか変なの。

こんなんで、みんな納得するの？

「いつだって選ぶのは異界から来た無関係の女だ。無能な。」
憎しみを込めた目でにらまれた。

確かに私も異界の人間なんですが、ひとつも選べないんですが。選択肢もないんですけど。

「お前らのせいで・・・。」

っちょ待って下さいよ。

私関係ないじゃないですか！！

第13話

若干いっちゃった目をしてアエーシュマさんは顔を寄せてきた。

「お前らに、好きにされてたまるか」

彼の手が私の喉にかかる。

アンラに絞められた事を思い出して暴れようとしたが出来ない。

彼の目が恐ろしくて、恐怖で体が動かない。

「安心しろ」

クツと喉を鳴らしアエーシュマさんは私の喉から手をはなした。

「まだ、殺さない。お前は利用できるはずだ。」

まだって。

「お前にも可能性がある。」

可能性？

何の可能性？

生き残る？

「お前だって異界の花嫁だろ」

・・・

イヤ。違うでしょう。

さんざん言われましたよ。

会う人みんな否定してましたって。

なのにアエーシュマさん。目がマジ。

「もう、異界の花嫁は呼べない。」

なんで？ つか呼んだら ややこしい事が増える気があるんですが？

「次に呼ぶには20年かかる。二人も召還してしまったしな。」
私はノーカウントですか。

たしかにオマケで付いて来てしまいましたけど

「アールマティが花嫁を手に入れたらどうなるだろうな」

……。意味がわかりません。

「いやいや。女子同士で結婚って」

「形だけで良いじゃないか。異界の血を引く子を産んで異界の花嫁に選ばれれば王になれる」

いろいろ細かく矛盾出てる気がするんですが……。

細かい事は無視してしまう方向なんでしょうか？
良いの？

「でも、召還できない。20年も待てない。」

召還うんぬんの前に気にしなければいかん事が盛り沢山です。

「お前が花嫁になってやれば、あの女は王になれる」

はあ?! 私?

「いや。アンラって人にも宗佑にもダメ烙印押されましたけど」
使えないとハッキリ言ってたし。

「どうかな? あいつらが言ってるだけだろ?」

いやいやいや。私には決定的に駄目な事があるでしょう。
君達だって言ってたじゃないですか。

「アエーシュマさんも言ってるじゃないですか。私のこと。

力の無い美しくない役立たずの物質って」

「だから？子を産まぬ異界の花嫁に何を求める？アンラは完璧を求めすぎる。」

何かもう・・・。

飲まずにやってられるか！

残っていたお酒を一気にあおったら、目の前がチカチカして頭が真っ白になった。

頭が考える事を拒否したんだろうなあ。

白の後には黒が来た。

第14話

気が付いたら床の上に寝ていた。

昨日、楽しくない話をアエーシエマさんから聞いて、酒を一気飲みした後の記憶が無い。

そのまま寝てしまったのか？

生きているって事はアエーシエマさんに失礼な事をしなかったと思うけど・・・。

それにしても、床にほったらかしって。

彼に優しさとか思いやりとか期待しても悲しくなるだけだからしいけどさ。

しばらくボンヤリしてたが、窓に映った自分の姿を見て驚愕した。

こっちに連れて来られた時に着ていたパジャマは酒を溢したのか黄色く変色していて臭いし、髪の毛はモシヤモシヤ。

顔はむくんでるし、よだれの跡があるし。ともかく汚い。

これは容姿の美醜ウンヌンとか言うレベルじゃない。

とりあえず、何とかしたいけど、何とかする為のグッズが無い。

顔を洗う為の水すらない。

蛇口ひねったら水がでる生活が懐かしいよ・・・。

誰かを呼ぶためには外に出なきゃならん。

でも、この姿で出たら今以上に辛い立場になりそうな気がするので

すが……。

とりあえず、手櫛で髪の毛をなんとか整えて、ベツトカバーで涎を拭く。

顔のムクミはどうすることも出来ないので諦める。

扉をそっと開けて頭だけ出し廊下を伺うと、緑色の髪の子が直立不動で扉の横に立っていた。

目が合う。

相手驚く。

「あの……。身支度をしたいと思っているのですが……」

「!!!!!!」

何も言わずにダッシュで去って行った……。

ひょっとして逃げられたの？

啞然としていたら、ピンクの頭が見えた。ザリチュさんだ。

「おはようございます。」

挨拶してみる。

「はい。おはようございます。」

挨拶を返してくれた。

今日も微笑みが美しい。

ピンクが慣れないけど。

ザリチュさんは大きなタライにいろいろ入れて持ってきてくれた。水差しに、着替え。その他諸々。

「お手伝い　いたしましょうか？」

爽やかな笑顔

「そんな！お手を煩わせる訳には！一人で大丈夫です」
気持ちだけ爽やかな笑顔で言ってみる。
見た目は汚れてるけどな。

「それでは何かあればまた」

爽やかな笑顔で去って行った。

何かありそうな気がするので、そのときはよろしくお願いします。
心の中でザリチュさんをお願いしとく。

一人で身支度って本当に久しぶり。

お城に居たときはヒヨコが何かとやってくれた。

ヒヨコはどうしてるだろう？

第15話（前書き）

放置しっぱなしでしたが、感想を書いて下さった方ありがとうございます。

第15話

身支度を整えて、空腹を感じ初めて悩んでいたら廊下から悲鳴が聞こえた。

若い女性の声。

勘弁して欲しい。

私が出て行っても被害が拡大しそうなので、大人しくしておこうと思っ
ているのですが悲鳴がやみません。

コエエー！一体何が起きているのでしょうか？？

「お許し下さい。アエーシュマ様！！」

泣き叫ぶ声。予想通りの展開で私まで泣きそうになるよ。

泣き声の力が弱まっている。

どうする……。どうした良い？

このままジッと息を潜めているのが正解なのは分かってる。
でも……。

音がしないように、そっとドアを開けた。

『後悔先に立たず』

目の前にDV現場広がる。

半裸の緑の髪の女性。その女性の髪の毛をつかみ鬼の形相で殴りか
かるアエーシュマさん。

夢だと思いたいけど、緊迫した空気がそれを許さない。

「貴様は我の子を産めばよいのだ！！！！それ以外に生きる道は無い！！！！」

ゴン！

アエーシユマさんグーで女性の顔を殴ったよ。

ゴンッって言ったよ！

血が出てるよ！！

ザリチュさん！どこに居るの？！

ザリチュさんでなくても良いから誰か！！

止めないと、あの子死んじゃうよ！！！！

「どいつもこいつも……。そんなに我が汚いか？！」

気が付いたらアエーシユマさんに後ろから抱き着いていた。

もちろん色っぽい感じではなく、止めるために。

「お、落ち着きましょう。アエーシユマさん。私の故郷では子供を産んで欲しいときは、優しく愛し合うのがセオリーでして。無理にするより、お互いが楽しみながらするのが、大人のたしなみっていうか。お互い無防備で挑む訳ですから少なからず心を許してですね」

鬼がこちらに向き直った。

「お前には関係が無い。黙れ！」

「えっと……。」

その言葉に手が震える。

私はアエーシユマさんの駒だ。

だから殺されてない。

しかも微妙な駒。

彼の気が変わればどうなるんだろうか？

でも……。

それを怯えて、ただ生きるの？

そう。私は臆病者だ。

生きたいんじゃない。死にたくない。ただそれだけ。

黙ろうと思った。

死にたくないから。

でもその時、緑の髪の女の子が動かなくなったのが見えた。

昨日 話したアエーシュマさんは話が通じたのに、なんでこんな事するの？

この世界に来て一番って言ってよいくらい通じた。

言葉が通じるようになったのもあるんだろうけど、彼には私の常識みたいなものが通じたはずなのに……。

「アエーシュマさんは、他の人とは違うと思ったのに……。唯一
まともだと思ったのに……。」

第16話

私はアエーシュマさんと話せた事で、この世界で生きて行く事に自分で思っている以上に希望を持ってしまうていたらしい。

なぜなら、話を通じたから。言葉が通じる様になった事も大きい、彼の言っている言葉の意味が分かったから。見た目が普通だったのも大きい。見慣れた茶色だったのも大きい。

その彼が、私が理解できないことをしている。あの赤い人と同じように。宗助と一緒に居たあの男が私にしようとしたことをしている。

気に入らないから殺す

私は平和ボケした日本人だ。人が死ぬところなんて見た事がない。理解ができない。

「我がまともだと？」

ゆらりとアエーシュマさんは私に振り返った。緑の子から離れた！思わずアエーシュマさんと彼女の間に移動する。

彼女の胸が上下しているのが分かり、詰めていた息がもれる。

「異界の女は我がまともに見えるらしい！はははは！」

大声で笑っているが、目が完全にいっちゃってる。

カチカチする音が聞こえたので何かと思ったら、自分が震えて歯がなる音だった。

自分のカチカチ音とアエーシュマさんの高笑い。

聞こえてくるのはそれだけ。

「我がまとう色を見て何も思わんか？」

いっちゃってる目でロックオンされた。

「この色は忌子の色よ。」

視線を外さず私の髪に手を伸ばす。

「お前の色は至高の色。」

髪を握る。手に血管が浮かぶほど強い力で。

髪なので痛みなど感じないはずなのに、心臓が痛い。
まるで髪と心臓が綱っがているかのように。

握りつぶされる・・・

「黒など！！！！！！」

思いつき髪を引っ張られ、引きずられた。

「こんな・・・こんな色など！！！」

いっちゃってる人に何言っても無駄だと思うが思わず口からでた

「私の世界では黒はダセーとかって若者は茶髪にします・・・」

「はぁー?!?!」

ドン！

髪を引っ張っていた手の力が抜けたのかそのまま私は床に落とされた。

第17話

常識とは何だろうか？

平成日本において、色で差別される事ってあるのだろうか？

人の美醜により見た目で判断などはされるが『色』でって。

金髪のクラスメートの事を「あの子、あんな髪の色しているけど結構マジメなんだよ」的なコメント入れてみたり、ピンクの髪にしちゃった友達に「ピンクって！アニメか！」と突っ込みは入れるが、差別はしない。それは元の色がある程度決まってるからだろうけど・・・。

人種差別と同じ経緯であるのだろうか・・・。

私にはわからない。この世界は美醜で力が決まるらしいけど、色も関係あるのかな？

「茶にする？！意味がわからない・・・馬鹿なのか？」

私の質問を受け付けてくれる可能性のある、唯一の人が私以上に混乱と疑問の渦に巻き込まれているので聞けない。先ほどからアエーシュマさんが呪詛のように茶髪にする日本の若者を非難する言葉をブツブツとつぶやいております。

アエーシュマさん。コペルニクスの思考の変換が必要だね。

今のままでは、たぶん理解できないと思う。

「貴様らには貴色をまとう誇りが無いのか！！！」

呪詛が吐き終わったのか、再び矛先が此方に向いた。

「誇りを持つ所が違うのだと思います。私達の世界でアジア圏に住む人間はほとんど黒です。珍しくもなんともありませんから、色に誇りを持つ人はいないと思います。」

私の言葉にアエーシュマさんは固まっている。

えっ？今まで知らなかったの？

今まで、こっちに呼ばれた人って地球の人では無かったのか？

黒髪、黒目が貴重な世界から呼ばれた？

それとも自分の貴重性を高める為に、言わなかった？

「あのー。私たちの前に、此方に呼ばれた方は、この事について何もおっしゃらなかったのでしょうか？」

アエーシュマさん動かない

「えっと。たぶん、私たちと違う世界から来られた方なんでしょうね。きっと。」

そちらの世界では、おそらく黒に誇りをもたれているのでは？私たちの世界くらいじゃないです。黒がいっぱいって！」

なぜだかわからないが、フォロー（？）をしてしまう。

「・・・」

私のフォロー（？）が効いたのかアエーシュマさんフラフラと動きだした。

フラフラと・・・。

歩き出した。廊下の向こうへ・・・。

えっと。緑の子をほったらかしてますがワタクシどうすれば良いのでしょうか。

第18話

アエーシユマさんがフラフラと漂いながら、どこぞに行ってしまったので、私はそっと緑の子をゆすった。

頭を打った時は動かしては、ならないって言うけどさ。グーパンチうけてたけどさ。

「大丈夫？」

確実に大丈夫では無い事はわかっているが、声をかける。私の中で一番優しい声で。

瞼と唇が震えている。

開けるのがしんどいのか？

顔は殴れられて腫れていると目を閉じているのでハッキリと美醜はわからないけど（たぶん美人）体はムッチムチのナイスバディーだ。オッパイはボーン。腰はキュッツ。ヒップはプリン。手足は長い。本当にこの世界の人間って綺麗。自称Cカップ。手足短め。胴長めの私って、どのくらいぶさいくに見えるんだろう？

「あ・あ・あ…」

助けを求めるように声を上げてる。

どうしたらいいの？私にできること……。

「ザリチュさーん！！！！！！」

大声で助けを呼んだ。私が今できる事なんて何もない。

……。いや今だけじゃなくて、この世界で出来る事なんて本当に

何もない。」

「助けて下さりありがとうございます。」

その後、私が大声で叫んだ瞬間、ザリチュさんが来てくれたので（絶対、私が呼ぶのをどこかで見ていたに違いない。あまりにもタイミングが良すぎる）緑の子を私が使っても良いと言われている部屋へ運んでもらった。彼女の痛々しい姿にザリチュさん何の驚きもせず、治療するのも慣れた感じで、『いつもの事』的な空気でたんと、進めて行くのを見て今更ながら恐怖が湧き上がってくる。

緑の子はやはり瞳も緑で、森の妖精のように可憐で、ナイスバディの持ち主とは思えぬ儚さ。

目を開けたら分かった、顔を殴られ腫れているのに美しいとわかる絶妙なバランス。

そして声がまた可愛い。

「いや。私は何も……。お礼はザリチュさんへ……」

「いえ。あなた様が止めて下さらなければ、アエーシユマ様は私を殺めていたと思います……。」

……。えっ?!

「私は子を、あの方の子を産むのが恐ろしいのです。」

おいおい。私の許容度とはつくにイッパイですよー。やめて下さい。

込み入った話は。

「もし、私が産んだ子が忌色をまどっていたら・・・」

自分で自分の体を抱きしめ震えている。

両目から涙が・・・。

そんなに茶色はダメなの？

「どーして茶色はダメなの？赤と黒の間の色だよ。」

茶色にカラーリングすると、退色して赤くなったりするじゃないっすか。

あ、しまった。思わず聞いてしまった。込み入った話に参加しちゃったよ！

「間の色？」

「痛いです。ザリチュさん」

私の肩をザリチュさんは碎けそうな程、力強く握ってくる。本当に痛い。

「あなた様には・・・そのように見えるのですか？！！」

緑の子は、これ以上無い位目を見開き、悲鳴の様な大声で私に詰め寄ってきた。

「うん。この世界に赤い髪の人いてるし。その人と黒い髪の人が子供とか作ったら茶色の子が産まれない？」

こっちの赤髪ってビビットすぎるからならないのかしら？

「あああ！！！！神よ！！！！」

えええええ!!!ザリチュさんは神に感謝の言葉を捧げながら号泣しだした。

緑の子は「何て事・・・何て事・・・」とエンドレスでリピート。

もう。何か無理。激しい感情表現に慣れていない日本人として代表的な対処法しかとれないよ。

人生で初めて神に祈りを捧げる人をリアルに見たし、エンドレスリピートも初めての体験だし。

私は二人が落ち着くまで『曖昧な笑み』を浮かべながら静かに見守ります・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6665g/>

選ばれない人

2011年11月18日04時14分発行